神奈川県考古学会

考古かながわ

第16号

1999年3月31日

何だか　変だぞ！

神奈川県考古学会総務
村　田　文　夫

最近、「何だか、変だぞ！」と感じるような文化財の話題が身近でおこっている。

その一つ。行財政改革・規制緩和・地方分権の波風が文化財行政にも押し寄せてきた。従来、文化庁が所管していた文化財保護法に基づく措置の幾つかを、法律的ないしは実質的に県・市町村教育委員会に委譲する動きだ。折りわるく、役所も潰れるのではないか、と思うほどの未曾有の財政危機が各自治体を襲っている。

こうした動きと絡めて“邪推”したくなるのが、神奈川県立埋蔵文化財センターの廃止と、県文化財保護課を、生涯学習文化財課に統合する組織改編である。特に後者によって、長年培ってきた県と市町村の信頼関係や、市町村が熱意をもって取り組みはじめた文化財行政の姿勢に、水が差されるようなことはあってはならない。が、現実的には文化財保護法の改正を目前にし、県・市町村が相連携し、ともに足腰を一段と鍛えなくてはいけない時期だけに、気勢を削がれた感は否定しようもないのである。

次に月刊「考古学ジャーナル」誌上の「激動の埋蔵文化財行政」シリーズも刺激的である。特に文化庁記念物課の和田勝彦氏の見解は、個人的なもの、とはいえ何かスッキリしない。

例えば、「埋蔵文化財の取り扱いは、その内容が発掘調査という考古学的手法を使って行われるものであっても、学術研究ではなく純粋の行政措置であるから、その原理として研究者世界の思想がそのまま用いなければならないということはそもそもない」とする一方で、遺跡のランク付けは当然必要だとも言う（429号）。こうした論理、実態と遊離していないか。

実際、県や市町村の行政・機関の先端で、研究者・行政官の二枚看板を背負って真面目に頑張っている人達に、そんな器用な振る舞いを強いられようか。例えば、遺跡のランク付けを公的に担保するためには、考古学の論理と不可分には成立しないし、「発掘＝純粋の行政措置」論をあまり強弁されると、私には「あなた達、穴掘り屋は余分なことを考えるな！」と言い放たれているのと同義の響きに聞こえてくる。

マスコミ先導・タイアップ型の事例は別にして、通常は発掘関係者がまず遺跡の内容を的確に把握し、その評価を客観的に纏めあげる作業からはじめる。それを行政組織の厳しい洗礼を浴びながらも主張していかなければ、きょうび史跡の保護・整備など望むべくもないのが現実だ。組織の先端で、行政官・研究者としての分かちがたい葛藤の中で苦闘している人達に、もう少し温かい目を注げないものであろうか。

第22回 神奈川県遺跡調査研究発表会開催される

1998年11月15日（日）鎌倉芸術館において第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会が開催されました。当日は天候にもめぐまれ会員をはじめとする考古学ファンら約300名の参加があり、盛況な発表会となりました。開会にあたり主催者の神奈川県考古学会寺田兼方会長と開催地の鎌倉市教育委員会小松眞一文化財課長の挨拶の後、前年度及び今年度前半に注目された県下10遺跡の調査成果の発表と研究発表（１件）が行われました。

1　大和市（仮）配水池内遺跡（麻生順司氏発表）では、立川ローム層の上位から下部まで連綿と50ヶ所以上の石器集中部と60基近い礫群が発見され20,000点を超える遺物群が出土し遺物密度の高い文化層が調査されました。これらの遺物は第５文化層から発見された２ヶ所の遺構との間に有機的な関連性が高く、狩猟生活を送っていたと考えられる旧石器時代のキャンプサイトにおけるテント状の簡易施設として捉えることが可能な遺構であると報告されました。

2　城山町新小倉橋関連遺跡（櫻井真貴氏発表）では、川尻中村遺跡と原東遺跡の２遺跡について発表が行われました。このうち川尻中村遺跡では縄文時代中期の竪穴住居跡、敷石住居跡、環状列石などの遺構が良好な状態で発見されています。出土遺物ではＪ９号住居跡から出土した頭にハチマキを巻いたと見られる土偶が注目されました。

3　川崎市多摩区No,61遺跡（呉地英夫氏発表）は多摩川河川の中州に発見された縄文時代後期の遺跡で、赤漆塗椀、赤漆塗櫛、カゴ状製品、アンペラ状製品、櫂など大量の木製品が出土している遺跡であることが報告されました。河川の中州という極めて特殊な立地条件にもかかわらず今日まで豊かな内容をもつ遺跡の残されていたことは注目されるところです。

4　南足柄市五反畑遺跡（安藤文一氏発表）で発見された縄文時代後期から晩期にかけての配石遺構と石棺墓は豊富な遺物をともなっており、関東地方でも他に例のない資料を多く含んでいる興味深い遺跡であることが報告されました。

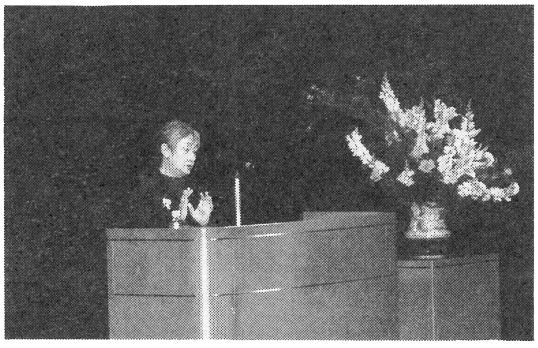
5　鎌倉市史跡東勝寺跡（菊川英政氏発表）は元弘３(1333)年に鎌倉幕府終焉の地となった中世史上著名な遺跡ですが、梁間４間×桁行７間以上の規模を有する大型の総柱式掘立柱建物跡が炭層の直下で発見されました。この建物が方丈（あるいは庫裡）と推定され、ここに東勝寺の主要な堂宇の一つが明らかになったことが報告されました。なお東勝寺跡は1998年７月31日付で国史跡に指定されました。

記念講演

午後の部の発表に先立ち、作家の永井路子先生によって「東勝寺跡によせて～遺跡が呼び覚ます太平記の世界～」と題する記念講演が行われました。講演では太平記に描かれている北条高時一門の人々が炎上する東勝寺で自刃する鎌倉幕府終焉の姿が熱っぽく語られるとともに、午前中に発表のあった東勝寺跡の発掘調査成果が文献史料だけではわからなかった歴史の真実を明らかにしたことを先生自身の感激とともに評価していただきました。

6　二宮町天神谷戸遺跡（村上吉正氏発表）では古墳時代から平安時代にいたる時期の竪穴住居跡を中心に構成される集落が発見されていることが報告されました。

7　鎌倉市若宮大路周辺遺跡群（宮田眞氏発表）



永井路子先生の記念講演の様子

は若宮大路の西側に位置する遺跡で、13世紀代と14世紀代の2時期に区分される方形竪穴建築跡、掘立柱建物跡、井戸及びかわらけ溜りなどの中世遺構群と南北方向の軸線をもち最大で10m以上の幅を有する水路と見られる古代の遺構が発見されています。鎌倉幕府開幕後の早い段階には湿地帯であったこの古代水路の上層を埋め立てて中世の町づくりが行われていた様子が明らかにされました。

8　小田原市小田原城三ノ丸東堀跡（諏訪間順氏発表）では小田原城の最後の近世化工事の様子を伝える「寛文図」に記載されている寛文改修工事の前後の状況が明らかにされ、三ノ丸東堀の堀の肩が確認され堀幅が確定できたことなどの大きな成果が得られたことが報告されました。

9　中世鎌倉における発掘調査の現状と課題（斉木秀雄氏発表）では1980年代以降、市街地で活発化した発掘調査の成果から主要な遺構・遺物の紹介とともに、公的な発掘調査体制や出土品を展示・公開する施設が未整備である現状について指摘がなされました。　（紙上発表）

10　小田原市久野下馬下遺跡第Ⅳ地点（小林義典氏発表）数百点におよぶ多量の土師器及び須恵器、滑石製臼玉（約500点）、滑石製模造品（勾玉、鏡）などが出土。遺跡地が当時、湿地帯あるいは水辺であったと推定されることから古墳時代中期の農耕儀礼に関わる祭祀遺構と考えられる。

11　鎌倉市宇津宮辻子幕府跡（原廣志氏発表）若宮大路側溝と同様の構造をもつ木組みの溝が宇津宮辻子幕府跡と推定される地域において初めて確認された。この溝は方向や規模、時期（鎌倉時代中期～末期）から若宮大路御所または北条小町邸の屋敷の外郭溝（堀）の一部と推定される。さらに幕府が溝の作事を御家人たちに課役（「御家人役」）として割りあてた工事区間の表示札と推定される「三丈　せきのやまの□□‥宗近」と墨書のある木簡が出土。

発表終了後、神奈川県考古学会伊東秀吉副会長より閉会の挨拶があり、無事日程を終了しました。　（小林康幸）

役員は次の分担によって、企画運営されていますので、ご紹介いたします。

会　　長　寺田兼方
副 会 長　伊東秀吉
総　　務　小川裕久
　　村田文夫

会の運営にあたる

会誌編集　川口徳治朗
　　岡本孝之
　　鈴木重信

「考古論叢神奈河」の編集、発行にあたる

連絡誌担当　白石浩之
　　明石　新
　　大塚眞弘
　　土井永好

「考古かながわ」の編集、発行にあたる

講座担当　後藤喜八郎
　　伊丹　徹
　　村澤正弘
　　加藤　緑

講演会、講座の企画、運営にあたる

見 学 会　松尾宣方
　　田村良照
　　安藤文一
　　近藤英夫

見学会の企画、運営にあたる

発 表 会　曽根博明
　　降矢順子
　　諏訪間　順
　　加藤信夫

遺跡調査・研究発表会の企画、運営にあたる

会　　計　織笠　昭
　　中村若枝

会の会計にあたる

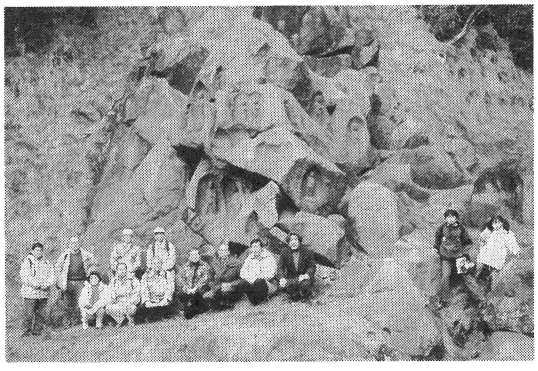
監　　事　市川規平
　　金子皓彦

元箱根石仏・石塔群を訪ねて

神奈川県考古学会主催の平成10年度最初の見学会は昨年12月６日（日）、箱根町教育委員会の伊藤潤さんに案内をお願いして、石仏・石塔群や旧街道石畳などが史跡整備された元箱根で実施されました。師走の寒風が肌を刺すような早朝、小学校６年生の近所の男子と小学校１年生になる私の長女の二人を伴い小田急ロマンスカーに乗って箱根湯元駅まで行き、改札口にて見学会用の小旗を持って参加者の来るのを待ちました。見学会担当役員と父親としての両方の責務を果たすためです。約１時間待って５人となり、それ以上来ないと判断して集合場所の「曽我兄弟の墓」に向かいました。現地に着くと９名の参加者が私達を迎えてくれました。掲載したスナップは磨崖仏を背にして私が撮った記念写真です。冬場の元箱根は零下に達する冷え込みだそうで、当日もかなり寒かったため元気なのは子供達だけでした。見学コースは曽我兄弟の墓バス停に集合し、精進ケ池の周囲に残される石仏・石塔群と六道地蔵などの説明を受け、山道を散策しながら途中で旧街道石畳を少しだけ歩いたりしながら甘酒茶屋まで向かうものでした。要所で伊藤さんの明快な説明を聞きながら一人の落伍者もなく、険しい山道を越えて午後２時半ごろ最終目的地の甘酒茶屋に着きました。森林浴した後の心地好い疲労感の中で味わった甘酒とお餅は、同行した子供達には忘れられない思い出になったようです。また解散後に箱根湯本で入った露天風呂も冷えきった身体には何とも言えぬ心地良さでした。参加者の皆さんお疲れさまでした。また休日を返上してガイドして下さった伊藤さんには一同に成り代わって感謝いたします。ありがとうございました。

さて元箱根の見学会は参加した私達にとってたいへん満足するものでした。ですが、参加者が14人しか集まらなかったのですから、企画的には成功したとは言い難いと思います。今回の見学会に先立って行われた小田原市「中里遺跡」の遺跡見学会では、マスコミの大々的な報道も手伝って、１日で12,000人もの見学者が殺到したそうです。この差はいったい何に原因するのでしょうか。いろいろな要因が考えられますが、何と言っても数百年・数千年の時を越えて私達の眼前に新鮮な姿を現す調査中の遺跡と、保存整備された遺跡や史跡の違いが第一に指摘されるでしょう。もちろん人を集めることが本会の一義的な目的ではないのですが、回を重ねる毎に参加人数が少なくなる傾向が見られるのも寂しいものです。企画する側としては、一人でも多くの会員・一般の方に参加してもらえるように試行錯誤しながらも前向きに健闘しているつもりです。とりあえず、今年度２回目の見学会は４月16日（金）～19日（日）の日程で韓国慶州の史跡巡りに決まりました。この企画が失敗したときは担当役員は責任をとるつもりでいます。またそうなれば今後、海外見学のチャンスはなくなるように思います。私達は大勢の仲間と韓国料理を食べて舌鼓したいと願っています。皆さん一緒に韓国へ行きましょう。

（田村　良照）



舶来遺物「佐波理匙（さはりさじ）」

昨今、若い人達の間ではグッチ、ルイ・ヴィトン、ティファニーと舶来品を身につけるのが流行している。この流行が良いか悪いかは別として、弥生時代以来、時の支配者層は中国大陸から文物を輸入し、その特権意識を高め、一般庶民とはかけ離れた存在として君臨していた。なかなか手に入らないものを入れ、身につけたり、使ったりすることは今も昔も変わりないようである。

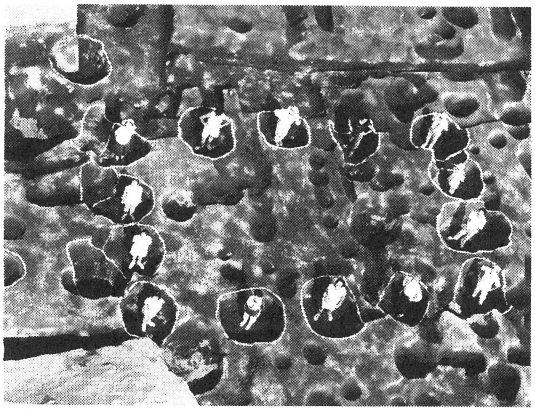
さて、ここで紹介する遺物は、平塚市の山王Ａ遺跡から発見された奈良時代の匙である。単なる匙ではなく上等な舶来品である。舶来品としたのは、非破壊分析で立証され、銅・錫・鉛の合金で造られた「佐波理」と言われる鍛造の匙で、新羅製品であることが分かった。大きさは全長26㎝、柄の長さ19㎝、身の部分が７㎝を測る大きな匙である。この佐波理匙が天下に知らしめたのは多量の匙が聖武天皇の遺品が「正倉院」に納められていたからである。束ねた紙切れに聖武天皇が新羅国から買い求めた記録が記されていた。鎮護国家を目指した天皇は、仏具としての佐波理の碗・皿・箸と一緒に買い求めた。仏教の法事等に使用した以外に、有力な貴族・僧侶・官人層に配布し「ハレの世界」で使用したものと考えられる。

ところで、匙は掘立柱建物跡の柱穴から須恵器甕の破片の上に丁寧に身の凹面を上にむけた状態で出土した。出土状態の観察から掘立柱建物が廃棄された後に納められたものではなく、柱を立てたときに納めたものであることが分かった。このことから、掘立柱建物の安全を祈願するために、土地の神様を鎮めるための地鎮具としての納められたものと考えられる。掘立柱建物跡の規模は梁行４間(10.1m)・桁行３間（6.5m)、柱間寸法が2.3ｍから1.9ｍと大型のもので、棟方向が真北であることに注目する必要がある。

この遺跡は調査面積約620㎡と平塚市では規模の大きな部類に入り、その成果として、竪穴住居跡９軒、掘立柱建物跡８棟、井戸跡１基、土杭４基、溝状遺構10条、道路条遺構１条、土壙墓１基、ピット314本や縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品、銅滓が発見されている。この遺跡での遺構の在り方は、周辺の国府域遺跡と異なり、掘立柱建物址が竪穴住居址より多く発見されていることであり、特異な場所と言える。

この特異な在り方は舶来品と言う当時の大変貴重で高価なものであった佐波理匙というものを介在することによって、単なる国府内集落とは異なり、国衙機能の一部としての施設と理解することができる。ただ、ものを生産する国衙工房とは考えられず、非生産部門としての文書の作成、出納事務などに関連した国衙を想定したい。

実用品であった佐波理匙が何故地鎮具として使われたのであろうか。また、どのような径路で入手したのであろうか。考古学は「謎解きの学問」と考えるが、いくら悩んでも考えてみても、解けないものは解けないと諦めている。しかし、考古学は面白い。　　（明石　新）



横須賀市長浜ノ上遺跡出土の石器について

佐藤　明生

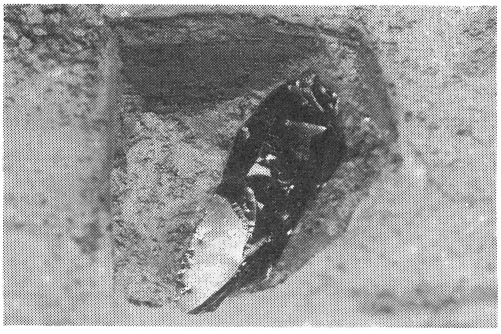
平成９年度に行った横須賀市長井にある長浜ノ上遺跡の調査は、三浦半島最古の石器出土を初めとして、この地の旧石器時代を考えていく上では、たいへん興味深いものとなった。

現状で三浦半島最古と考えられる石器は４点である。出土層位はＡＴ下位にあたる相模野Ｂ４上部相当層（長井台地Ｖｂ層）。いずれも麦草峠産黒曜石を石材とする縦長剥片で、最大のものは長さ８cmを越える。剥片の両側縁に微細剥離や線状痕が観察できる石器である。

本遺跡を含む長井台地遺跡群からは昭和61年度に始まる確認調査で、相模野Ｌ１Ｈの細石器ブロック、同Ｂ１のナイフ形石器ブロック、ＡＴ下位の土坑などが検出され、旧石器時代に関するいくつかの新知見がもたらされた。そのため、今回の調査に際しても未知なる遺構・遺物の検出には非常に期待が寄せられた。

調査は短波無線アンテナ２基の基礎が対象で、一辺４～８ｍの方形調査区が26箇所、まるで試掘である。面的な調査ができないばかりか、遺構・遺物の未確認箇所を選んでアンテナが設計されたため、掘っても掘っても何も出ない調査が続いた。遺跡の形成があってしかるべき所に何もないことを確認することも一つの成果であると自問自答しながらも、小さな剥片が２、３片では調査そのものの必要性を問われることになる。見過ごした遺物がないか掘り山を徘徊しつつ、調査も終盤にさしかかってしまった。

こうした思うようにならない焦燥感さえ沸いてくる調査が続くと精神に影響する。ある夜、表土からさほど深くない所で黒曜石の石器やら剥片が夥しく出土する夢を見た。あたり一面黒曜石である。そしてその直後、夢で見たあたりを掘ることになった。ＡＴ下位の石器が出土した調査区Ｋである。相当に期待した。そして掘った。しかし出ない。ＡＴ層まで掘り下げても何も出なかった。夢にまで見たのに‥‥。この時点で調査区の深さは1.5mを越えていた。そこでその一角を深掘りする。ＡＴ下位層の探索である。ただし念のためという気持ちもある。それから２日、「黒曜石が出た」という声を耳にした。別の調査区で半ば自棄気味にセクションを引いていた時である。「どこで？」「Ｋ！」「マジかよ」。思わず走り寄ると、そこには紛れもない黒光りする黒曜石があった。それもかなり深い。長井台地Ｖｂ層と呼ぶ下部黒色帯の中程にしっかりと鎮座していた。期待するものの出現に喜ぶのと同時に、何とか格好のつくものが出てホッとしたものである。



石器出土状況

三浦半島における旧石器時代の調査・研究は長い間不毛であった。その原因に関東ロームの堆積が貧弱な丘陵地形が多く、層位的検証に耐え得る資料が期待できなかったことや遺跡の絶対数も少ないと考えられたからである。しかし、長井台地遺跡群の確認調査以降、横須賀市大塚東遺跡、三浦市赤坂遺跡などの調査で、徐々に資料の蓄積を見る。平成10年夏には長浜ノ上遺跡のナイフ形石器ブロックの全掘調査も敢行した。一つのまとまりある成果を提供できるだろう。層序もテフラ分析に基づいて相模野台地との対比も十分に可能になった。そればかりか三浦半島という地理的環境から古東京川を隔てた房総半島の影響も考えられ、相模野台地とは違った特性も見出だされるであろう。

ただし前途遼遠。今後の三浦半島の旧石器時代研究を暖かく見守っていただきたい。

考古学入門講座「縄文ムラの風景」

今年度の入門講座は川崎市の溝ノ口にて行いました。会場の高津市民館は駅前のビルの中にあり、便利である反面、初めての方にとってはわかりずらかったようです。それでも約200人の会場で120～30人程の参加がありました。今回はいままでのシンポジウム式から普通の講演会式に変えてみました。シンポジウム式にしてしまうとどうしても専門的になりがちになってしまい、入門講座から離れてしまうからです。また、考古学の専門家だけではなく、建築学や生物学などの他分野の方々からのアプローチということも行ってみました。また、広報活動も今までと違って、会場を中心としたエリアの高校や公民館にカラーポスター、さらにタウン紙などに記事の掲載などをこまめに行いました。そのせいもあってか、会場には高校生らしき人やポスターをみて知った等のアンケート記載がありました。今後もこのような方法をとってみたいと思っています。

さて、内容ですが、村田文夫さんによる今回の講演会の趣旨説明をふまえた全体の紹介の後、大林組の林章さんによる建築学の見地から青森県三内丸山遺跡の巨大建造物の復元について、秋田かな子さんによる県内外の石にまつわる調査事例から石によって築造された遺構の性格について、松島義章さんによる古生物学の立場から縄文時代の海岸線の復元を通しての環境について、わざわざ栃木県鹿沼市から来ていただいた永岡弘章さんにて神明前遺跡で発見されたトチの実の水さらし跡の事例を通してのムラの様子について、安孫子昭二さんによる多摩ニュータウンNo.446遺跡をモデルにした縄文中期ムラの人口や住居数の復元について、港北ニュータウンで調査されている坂本彰さんによる貝塚を多く形成した縄文前期ムラの復元と古梅谷遺跡の木道からムラムラを結ぶ縄文の道について、小林義典さんによる相模の大規模な縄文中期ムラである岡田遺跡と下溝遺跡群の事例からムラの時間的な動きについての講義があり、それぞれの縄文ムラの風景復元がなされました。

近頃の縄文時代の話題は、青森県三内丸山遺跡を代表とした「巨大な」遺跡の話題に押されてしまって、非常に影の薄い状態にありました関東地方の縄文ムラの最近の調査事例にも触れられて有意義であったと思います。

講演後に行われた質疑応答では会場から10人近い質問がありました。トイレの問題、低地にムラはなかったのか、土偶の意味は、縄文人の服装は、三内丸山遺跡が栄えた頃は今と同じように雪がたくさん降っていたのか、遺物の多さ＝質が高いと見られていないか等々、遺跡ではほとんど発見されないために研究が進められていない分野の問いが多くみられ、講師の方々が困ってしまうことが多々ありました。逆に発見されないから話されない話題が、参加者にとってはどうなっているのだろうという疑問になるのだろうと思いました。縄文ムラを復元するにはわからないことが多々あることが、質疑応答の時間を通して再認識することができたような気がします。　（村澤　正弘）

情報案内

特別展

「磁器の技と美――有田そして瀬戸へ――」　神奈川県立歴史博物館　4／24～5／30　休月、祝翌（除土日）

「発掘された船橋の遺跡――近年の調査成果展」　船橋市郷土資料館　3／2～5／30　休月、祝

「発掘された日本列島'99」　江戸東京博物館　6／12～7／7　休月（除休）、休翌火

「発掘された町田の遺跡――木曽森野、長津田上の原遺跡――」　町田市立博物館　5／1～6／13　休月（除休）、休翌平

「物流の考古学」　山梨県立考古博物館　4／24～6／27　休月（除祝）、休翌（除休）

「登呂むらの知恵と謎」　静岡市立登呂博物館　4／1～5／30　休月、休翌平、月末［除休］

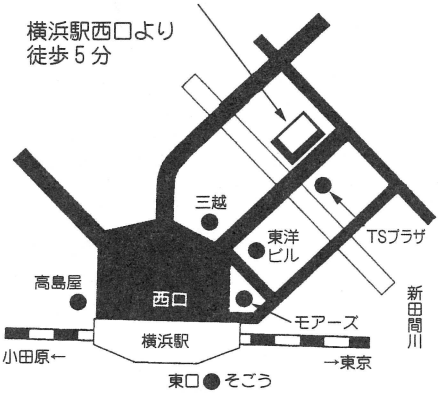
平成11年度総会のお知らせ

期　　日　平成11年６月12日(土) 13時00分～16時30分
会　　場　かながわ県民センター２階ホール
総会議事　平成10年度事業報告、収支決算報告・平成11年度事業計画案・予算案・その他

総会終了後『'98かながわ考古トピックス』を開催します。ふるって参加してください。

旧石器時代　砂田　佳弘　氏
縄文時代　　山本　暉久　氏
弥生時代～古墳時代前期　大島　慎一　氏
古墳時代後期～古代　　大上　周三　氏
中・近世　　小林　康幸　氏

かながわ県民センター



〒221　横浜市神奈川区鶴屋町２－24－２
かながわ県民センター
TEL　045-312-1121

会員名簿等の変更がありますのでお知らせいたします。

新入会員

安藤広道
池元善秋
長谷川　誠
宮嶋弘行
大内　宏

[redacted]

住所変更

安達尊伸
池田　治
上本進二
臼井　悟
大河内　勉
大野賢二
禿　仁志
河合英夫
櫻井眞貴
須藤智夫
曽根博明
高橋真美
浜野浩美（土屋）
内藤和美

[redacted]

根本睦子
野崎欽五
林原利明
安本利正

[redacted]

次の会員がお亡くなりになりました。記してご冥福を祈ります。

三田恒一氏 1996.7 岩田與一1997.5　日野一郎 1997.11　岡本勇1997.11　後藤守 1988.3

編集後記

３月28日開催されました「入門講座縄文ムラの風景」の報告を掲載するために、例年より若干遅れました。

３月は未だ三寒四温の日が続いていますが、お身体にご自愛ください。

来年度も盛りだくさんの事業を企画しています。是非会員からのご意見をお待ちしています。

考古かながわ　第16号

発　行　神奈川県考古学会
発行日　1999年３月31日
編集者　明石　新、大塚眞弘
　　白石浩之、土井永好
事務局　東海大学文学部考古学研究室内
　　〒259-1207　平塚市北金目1117
　　郵便振替　00240－９－71208
　　神奈川県考古学会
印刷所　有限会社 長谷川印刷